

4. <水球陣>関東学生リーグ第4戦

H25.6.8 対東京工業大 @専修大学生田プール

東大 2 3 2 1 計8

東工大 3 1 4 2 計10

得点者：浪間(5)、梶原(3)

前回の慶應戦で大敗を喫したことにより、上位リーグ進出にはこの試合で勝つことが絶対条件となった。この試合に向けて練習した作戦を完璧に遂行し、何としてでも敵のエースを封じ込めたいところ。絶対に負けられない戦いが始まる。

第1ピリオド

程よい緊張感の中幕をあけた第1ピリオド。だが早々にカウンターから一点を失ってしまう。このまま流れを持っていかれるわけにはいかない。そこで魅せたのは東大のエース浪間だ。トップ抜けから、キーパーとディフェンスに潰されながら疋田から受けたボールをゴールへ叩き込む。さらにセットから相手の浪間への下がりが中途半端になったところで桐生からパスインが入りそれを浪間が落ち着いて決める。東工のエースへの下がりのディフェンスも機能している。だがお互いに点が入らず、ラリーの続く展開となり、キーパー疋田が二度の好セーブをみせるもその度にコーナーを取られ、ついに一点を失ってしまう。東大も退水からチャンスを作るもターンオーバーの際に逆に退水をとられ、ミドルを決められる。結局2-3でこのピリオドを終える。2ピリで逆転して流れを引き戻したい。

第2ピリオド

東大のセットが大きくなり、打つ手なしかと思われた時、池亀の何気ないパスを浪間が華麗なバックシュートで決める。さらに梶原がディフェンスを突き放しながら池亀の上パスを受け取りゴール。流れに乗っていきたい東大はなおも梶原が潰されながらシュートを打ちこぼれ球を自分で押し込む。東工のエースを今のところ完全に抑えているし、疋田も何度もミドルを防いでいる。このままいけば勝てる。油断するのも東の間、こんなところで沈黙する東工ではない。東大の懸命なディフェンスをいとも簡単に回しこまれ一点を失う。結局5-4でこのピリオドを終える。だが体力に不安を残す東大に対し、泳ぎには自信のある東工、油断ならない展開だ。

第3ピリオド

いよいよ勝負の後半戦が幕を開ける。ここで東工は東大の下がりに対抗してエースをフローターからA45に配置する作戦をとってきた。開始からしばらくは両キーパーの好セーブなどにより互いに得点の入らない試合展開が続いたが、ディフェンス参加していなかった東工のエースにボールが入り、池亀が懸命のノーファールで抑えようとするも突き放され、ミドルを決められてしまう。ついに試合はふりだしに戻った。だが、引き分けが許されない東大は何としても一点が欲しい。そんなときだった。東大のエース浪間がパスインされたボールを相手のディフェンスから素早く離れてゴールにたたきこみ、東大に待望の追加点！！かのように思われた。だが、判定は浪間のオフエンシブ。相手ボールとなった。ここで東工大に、東大の予期せぬプレーが飛び出す。ループシュートだ。事前のミーティングでは東工にはループは無いということで皆意見が一致していた。東大に不安が立ち込める。何とか追加点を取りたい東大は桐生からのパスを浪間が受けてフローティングからシュート。これが二回続き、いい流れかと思いきや5mシュートやミドルで2点を失い再び劣勢に立たされる。結局このピリオドを7-8で終える。勝機はある。4ピリにすべてをかけ、必ず勝つ！

第4ピリオド

東大一点ビハインドで幕を開けた第4ピリオド。ここで東工のエースが今日好調のエース浪間をマークしはじめた。東大も攻め手を失うわけにはいかない。キャプテン大脇のハンツーや藤目のミドルなど、浪間無しでの攻めを組立て、幾度かチャンスを作るが、ネットを揺らすには至らない。双方に得点のないまま3分が経過したときだった。中に入った梶原がディフェンス二人を相手に驚異的な粘りをみせ、ゴールの左隅をとらえる。一年の活躍にこたえたい東大であったが、東工のエースがファールからの7mシュートで綺麗な弧を描くループを放ち、キーパー疋田の頭上を越えていく。そして退水から再びループが飛び出し、ついに2点差。試合時間は残り2分30秒。まだ時間はある、皆がそう信じている。わずかな可能性を信じて皆が懸命にプレスをかけ、攻撃のチャンスを生み出そうとする。だが、時間は決して我々の味方をしない。無情にも試合終了の笛が鳴った。結果8-10。

下がりのディフェンスの機能した前半とは打って変わり、相手の作戦変更に対応しきれなかった後半は忽ち劣勢に立たされた。作戦を一つしか想定せずに臨んだことがこの試合の敗因だろう。この試合に負けたことにより上位リーグ進出、ひいてはインカレ進出を果た

せなかったが、まだ夏リーグは終わったわけではない。8月には七帝もある。俺たちの夏は始まったばかりだ！！

最後に、応援にいらして下さった吉田さん、林裕三さん、三宅さん、堀江さん、只野さん、有吉さん、監督をして頂いた田丸さんにお礼申し上げます。

(文責 石田慶太)